

『我が陣営にあるべし』

一家康の叔母が継いだ笹山の片山家―

本書は、戦国時代末期に松平家へ水野家が仕えるようになったいきさつを近年解説された「片山家文書」から明らかにする歴史研究書である。『我が陣営にあるべし』という書名は、今川家の支配から自立した家康（21 歳）が、刈谷城主の兄・水野信元の配下を飛び出し、三河鷲塚村で浪人となっていた弟・忠重ら水野家の武将にかけた言葉である。

永禄三年（1560）の桶狭間合戦では、松平家は今川方、水野家は織田方で戦った。この合戦で、あろうことか水野信元は敵方の大高城の家康に、今川義元の討死にを伝え、城からの撤収を勧めたのである。ところが信長は、合戦後すぐに信元に対し家康討伐を厳命した。家康は、岡崎城に戻るや織田勢の攻撃に備え、信長方の挙母城・梅坪城・沓掛城を攻撃した。さらに刈谷城に迫り十八町畷で水野信元と合戦となった。激戦で家康勢は杉浦勝重、村越平三郎が討死し、大久保忠勝、大久保忠豊、大久保忠世、太田吉勝らは首級を得た。水野勢は追い立てられ、遂に刈谷城に逃げ込んだ。家康勢は討取った四十七の首級を十八町畷に吊るして並べ、この戦果をさらした。水野家中で犠牲者が増加する中で城主の兄・信元に弟・忠重は不満を持った。

この時期に忠重は同族の水野太郎作らと刈谷城を去ったのである。忠重、太郎作らが身を寄せたのは碧海郡鷲塚村間無の片山家であった。同家には忠重の姉・於亀が嫁いでいた。家康の母・於大や信元、忠重、於亀らは、みな水野忠政の子どもという関係であった。

織田信長が家康討伐から和睦・同盟へと方針転換をしたのはこの時期であった。信長は、家康の伯父・水野信元に家康との和睦交渉を命じた。こうして信長と家康の和睦は清州城で結ばれた。この同盟は、戦国時代終焉への転換点となる出来事であった。

同盟締結後、家康は三河国内の本願寺勢力を抑え込む準備を開始した。真宗門徒は、寺領への課税を認めていなかったからである。

永禄六年（1563）秋、家康は本願寺教団との戦端を開いた。ところが一旦戦端を開くと家康の予想をはるかに超える状況になった。僧侶・尼女、そして家康家臣からも続々と寺院側につく門徒武士が現れたのである。門徒らは死に臆することなく女、子どもまでもが家康の敵となっていくた。

家康は叔母の於亀を頼り鷲塚村・片山家を訪れ、忠重、太郎作ら水野家の武将に加勢を求めたのである。「片山家文書」には「これ、水野家の徳川家への御奉公の始めなり」と記されている。三河一向一揆では、忠重、太郎作ら水野家の武将が大活躍をした。

家康は一向一揆平定後、水野忠重を鷲塚村地頭に任じている。忠重は城山に砦城を築きこの地を 20 年程支配した。忠重は天正八年（1580）織田信長より刈谷城主を命じられ、鷲塚砦には代官が置かれた。

碧南の歴史へのいざない

問合せ
文化財課内市史資料
調査室 ☎(41)4566

No.58 驚塚城主 水野忠重 (1)

400年ほど前までは、現在の東中学校のある高台の北側は、衣ヶ浦に続く入り江になっていました。戦国時代の終わりごろ、この入り江を隔てた北の高台（尾城公園の北）に驚塚を治める水野忠重の砦がありました。

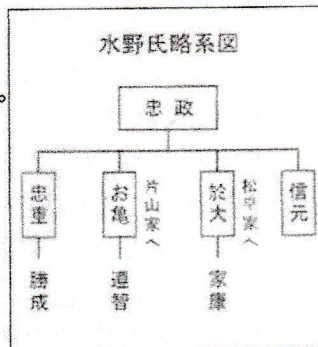
戦国時代の城や砦の数は2万とも3万とも推計されていますが、信長、秀吉の時代には3千ほどになっています。江戸時代になると、幕府は大名に居城のみとする命令を出し170にまで激減しました。

城は戦のためではなく、政治を行う場所となったのです。驚塚にあった城は、全国に2万、3万もあったころの、砦の一つといえます。

忠重は、戦国時代の1541年、水野忠政の末子として刈谷城で生まれました。忠政は知多半島北部の緒川に勢力を持ち、刈谷へ進出しています。まわりは織田、松平、今川と水野氏以上に大きな勢力に囲まれていました。水野忠政は、織田氏に協力しつつ、

「於大」をはじめ4人もの娘を松平側へ嫁がせて領地を守ろうとしました。松平清康に仕えていた驚塚の片山遵通にも忠政の娘「お亀」が嫁ぎました。

忠重が3歳のとき、父忠政が亡くなると、水野家は兄の信元が継ぎました。信元が織田氏への協力を鮮明にすると、松平氏へ嫁いでいた姉たちは刈谷へ戻されました。岡崎城主松平広忠に嫁いだ姉の「於大」は、子の竹千代（家康）と幼いころに離れはなれていました。しかし、松平氏の家臣である小川（安城市）の石川清兼や驚塚の片山遵通に嫁いだ忠重の姉「お亀」が離縁されることはありませんでした。



No.59 驚塚城主 水野忠重 (2)

戦国時代のころ、今川の勢力が徐々に尾張までおよぶと、織田側の水野信元と今川側の松平氏は代理戦争のように戦いました。忠重もほかの兄弟とともに信元に従い、家康の軍勢を相手に18歳のとき、石ヶ瀬川の戦いで初陣を飾りました。「信長公記」という本には、信長が初陣の忠重をほめたたと書かれています。

水野忠重の姉・お亀が嫁いだ驚塚片山家のあった場所は、現在の荒子神明社の敷地でした。驚塚片山家には、このころのことが書かれた覚書、系図、過去帳などが残されています。これら「片山家文書」によると、お亀の夫・遵通は、1560年の桶狭間合戦の3か月前に病気で亡くなってしまいました。さらに遵通の跡を継いだ弟の勝高は、桶狭間合戦で討死をしてしまいました。驚塚片山家には、お亀と子どもの遵智が残されました。

一方、信長方の水野忠重は、いとこの水野太郎作清久らと一緒に戦っていました。太郎作は、忠重より3歳下で16歳でした。

水野一族を率いるのは、水野信元ですが、桶狭間合戦の後、忠重は兄の信元に対し不満を持つようになったと伝えられています。後に忠重の長男・勝成が書いた「水野勝成覚書」には、「せつ者の親は、兄の信元に何やら不足を申し、刈谷城を立ち退き、三河の驚塚というところで牢人をしていた」と書かれています。



△信長が中世から近世への幕を開けたと表現する「近世の曙」像（名古屋市緑区有松町）

No.60 驚塚城主 水野忠重 (3)

水野信元は、武将として傑出^{けっしゅつ}していました。いち早く織田家と同盟関係をつくり知多半島を支配下に置いています。しかし、水野家中で、信元に仕えることをよしとせず、忠重とともに浪人となる仲間がいました。水野太郎作清久とその父、さらに村越又一郎たちでした。

桶狭間合戦後に忠重、太郎作らが身を寄せたのは、忠重の姉お亀が嫁いだ三河驚塚村片山家でした。居場所に困っている弟の忠重らを姉のお亀が引き受けたものと思われます。『片山家文書』には、「親族の事ゆえ、皆いっしょに当家へ引き受け置かれました」とあります。新井白石が編さんした幕府の歴史書『藩翰譜^{はんかんふ}』には、「忠重は信元の舎弟^{しやてい}といえども、兄弟の中、常に不快にして、驚塚という所に引きこもりおり」と書かれています。

桶狭間合戦は、徳川家康が戦国大名へと自立する戦となりました。

家康は、岡崎城に戻るとほどなく、矢作川下流域を支配する吉良氏を攻めたとて、降伏させました。つづいて家康は本願寺派教団と対立を深めました。お寺の領地からも年貢^{ねんぎん}収奪をはかりたかったのです。お坊さん相手の戦ですから、家康は容易に従わせることができる考えたようです。ところがいったん戦になると教団勢力は家康の予想をはるかに超えるものでした。家臣の多くは本願寺派の門徒^{もんた}で、教団側につく者が続出しました。

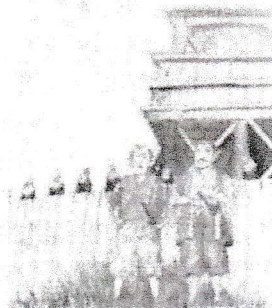
1563年の秋から冬にかけて一揆^{いぎ}勢力が拡大するなかで、家康も兵力の増強に奔走しました。『片山家文書』には、「永禄6年(1563)に三河本願寺一揆がさし起こり、その節に家康公は、忠重、太郎作にお頼みになられた」とあります。



No.61 驚塚城主 水野忠重 (4)

水野忠重とともに驚塚へ来た水野太郎作(清久)は、自らの覚書『水野左近覚書^{みずのさこんおぼえがき}』を書き残しています。そのなかで、家康と太郎作の父親(太郎作清信)との永禄6年秋の片山家ででのやり取りが次のように詳細に書かれています。家康は「桶狭間合戦の一番やりは、太郎作殿であったとのことですが」と父に問い、父は「その一番やりは、私でなく息子が一番やりの高名をあげたのです」と答えたというのです。

「これは家康様にお仕える前のことですが、家康様が一番やりのことを御存じだったので覚書に書くのです」と書いています。家康が忠重、太郎作らに「我が陣営にあるべし」と説得したことも書き残されています。

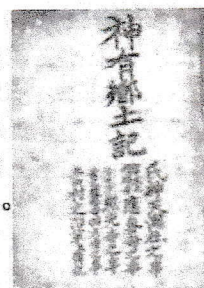


片山家には、水野家武将たちの武具と、縁起ものの「勝栗」を用意したことが伝えられています。

忠重、太郎作ら水野家の武将たちは、家康の岡崎城に入り、一揆^{いぎ}方の大将を討ち取るという活躍が『徳川実紀』など多くの歴史書に書かれています。

『片山家文書』には「これは水野家が徳川家に御奉公する最初のできごとだ」と書いてあります。

片山家で浪人をしていた水野忠重、太郎作らは、家康に仕え、この一揆で活躍すると、そのまま家康に仕えました。『神有郷土記^{とりのでしやう}』には「岡崎の城主、徳川家康は驚塚村の城山に砦城を築き、母の弟水野忠重をその城主に任じ本村を支配させる」とあります。浪人をしていた忠重は、姉お亀のところに居たことで、家康の窮地を助けることができました。忠重、太郎作らは大活躍をし、そのまま家康に仕え、驚塚の支配をまかされました。家康22歳、忠重23歳の時のことでした。



△神有郷土記 (個人蔵)

No.62 鷺塚城主水野忠重 (5)

水野忠重の兄・信元は織田信長に協力し、桶狭間合戦のあと信長と家康の同盟を仲介しています。家康と信元と信長は三者が対等な立場での軍事同盟を結びました。

信長は足利義昭を利用し、京都へ上ると信長に逆らう勢力を次々と破っていきました。信長の兵力が圧倒的なものとなるに従い、家康、信元は信長の家臣のような地位へと追いやられてしまいました。

信長にとって甲斐の武田氏は強敵でした。このような時、信長の武将・佐久間信盛が、武田方と水野信元は内通しているといつぐちをしました（『松平記巻6』）。水野領内の者が武田方の岩村城の兵に食料を渡したというものでした。信長を恐れた信元は、岡崎へ逃れ家康を頼りましたが、岡崎大樹寺で家康の家臣に討たれてしまいました。家康は信元を討たねば、自分が疑われることを知っていたといわれています。そのため水野家は、一時的ですが断絶となりました。

信長は、佐久間信盛には大阪石山本願寺攻めを命じていましたが、何年も落城させることができませんでした。怒った信長は成果をあげることを命じました。同じ時期の羽柴秀吉、明智光秀、柴田勝家らの活躍は目ざましいものでした。

信長は、信盛に与えていた水野領と刈谷城を、家康に仕えている水野忠重に与えることにしました。忠重は、鷺塚城主から刈谷城主へと変わったのです。



△水野忠重
(広島県福山市賢忠寺蔵)

No.63 鷺塚城主水野忠重(6)

1580年、信長により御家断絶となっていた水野家は、水野忠重が刈谷城主となったことで再興されました。『神有郷土記』には、忠重らが去った鷺塚城は1590年まで徳川家康配下の代官が入り支配したと書かれています。この年、ほぼ天下を手に入れた豊臣秀吉は家康に関東への国替えを命じたのです。これにより鷺塚城は廃城となりました。

1598年に秀吉が亡くなると豊臣政権は、家康派（東軍）、石田三成派（西軍）へと分裂がはじまりました。この頃、鷺塚の片山家に嫁いだ忠重の姉・お亀の子ども遵智は、叔父である刈谷城主水野忠重に仕えていました。忠重は、いよいよ三成派（西軍）との大戦は避けられないと考えていたようです。『片山家覚書』には、関ヶ原合戦の2か月前、忠重に招かれた遵智は「この刀で高名をあげるように」と刀を頂いたことが書かれています。1600年の7月19日、忠重の身に大変なことが起こりました。知立宿での

酒席で加賀野井重望に暗殺されてしまったのです。

忠重暗殺の知らせは、上杉討伐に向かっていた家康に伝えられると、軍中にいる長男勝成を後継者と決め刈谷城へ戻しています。その後、猛将と恐れられた勝成は、関ヶ原合戦、大坂の陣を経て、西国大名の押さえとして備後福山10万石の藩主となっています。晩年の勝成は、福山を発展させた名君として領民から慕われています。

忠重とともに鷺塚へ来た水野太郎作清久とその子孫は、徳川御三家でもある紀州藩の家老として、代々紀州藩に仕えました。

鷺塚の片山家は太郎作清久の弟にあたる道智が養子として入りました。この家は武家とはならず、代々鷺塚村庄屋をつとめ明治を迎えています。



△片山家守護神 木造三面六臂大黒天立像（市指定文化財 鷺塚遍照院蔵）

ゴールドライフオンライン

【連載】我が陣営にあるべし

ゴールドライフオンラインは、情報格差の解消を目的とした幻冬舎グループ企業による無料コンテンツ。

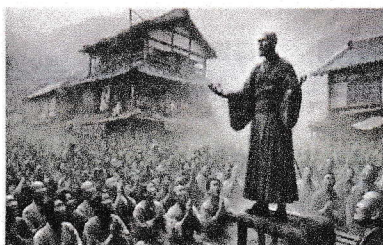
『我が陣営にあるべし』電子書籍は有料（940円）だがネット上で読むこのサイトは無料。ただ連載終了まで、あと2年程時間が必要となる。



歴史・地理 『我が陣営にあるべし』【新連載】 林口宏

徳川家康・天下太平の影に三河牢人!? …300年以上続く「徳川家」「水野家」の協力関係、その始まりの言葉が「我が陣営にあるべし」

2025.02.16



歴史・地理 『我が陣営にあるべし』【第2回】 林口宏

蓮如の布教以後、浄土真宗一色に塗りつぶされていった「真宗王国」矢作川流域。この地を治めたのは、徳川家康の祖先である松平氏で…

2025.03.30



歴史・地理 『我が陣営にあるべし』【第3回】 林口宏

時は明応、五百年前。三河の鷺塚村で西条吉良家に仕えた片山家は、数多の戦で名を挙げた。新田義貞公の家紋も掲げたその勇姿

2025.05.07



歴史・地理 『我が陣営にあるべし』【第4回】 林口宏

菊池一族の末裔・片山忠光・忠正親子が肥後から三河へ——吉良家から松平家へと仕えた南北朝から戦国の動乱を辿る

2025.06.30



歴史・地理 『我が陣営にあるべし』【第5回】 林口宏

慈悲の心がなく家臣に情けをかけることもなかった松平信忠。本当に家臣の片山忠正を手討ちにしたのだろうか？

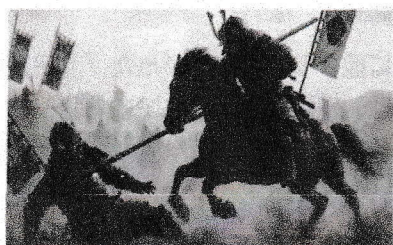
2025.08.23



歴史・地理 『我が陣営にあるべし』【第6回】 林口宏

武士の歴史はお墓や古文書だけじゃない。お寺の過去帳が語る記録—信光寺に伝わる記録を元に、知られざる戦国の物語をたどる—

2025.10.11



歴史・地理 『我が陣営にあるべし』【第7回】 林口宏

信長が称賛した、戦国武将の行動は？…敵の首を獲るところで、あえて自分では獲らず…

2025.12.01



歴史・地理 『我が陣営にあるべし』【第8回】 林口宏

16歳で戦場に立ち、敵の首を取った少年武将——桶狭間の戦いに名を刻んだ水野太郎作清久と、丸根砦で散った片山勝高の真実

2026.01.20



歴史・地理 『我が陣営にあるべし』【第9回】 林口宏

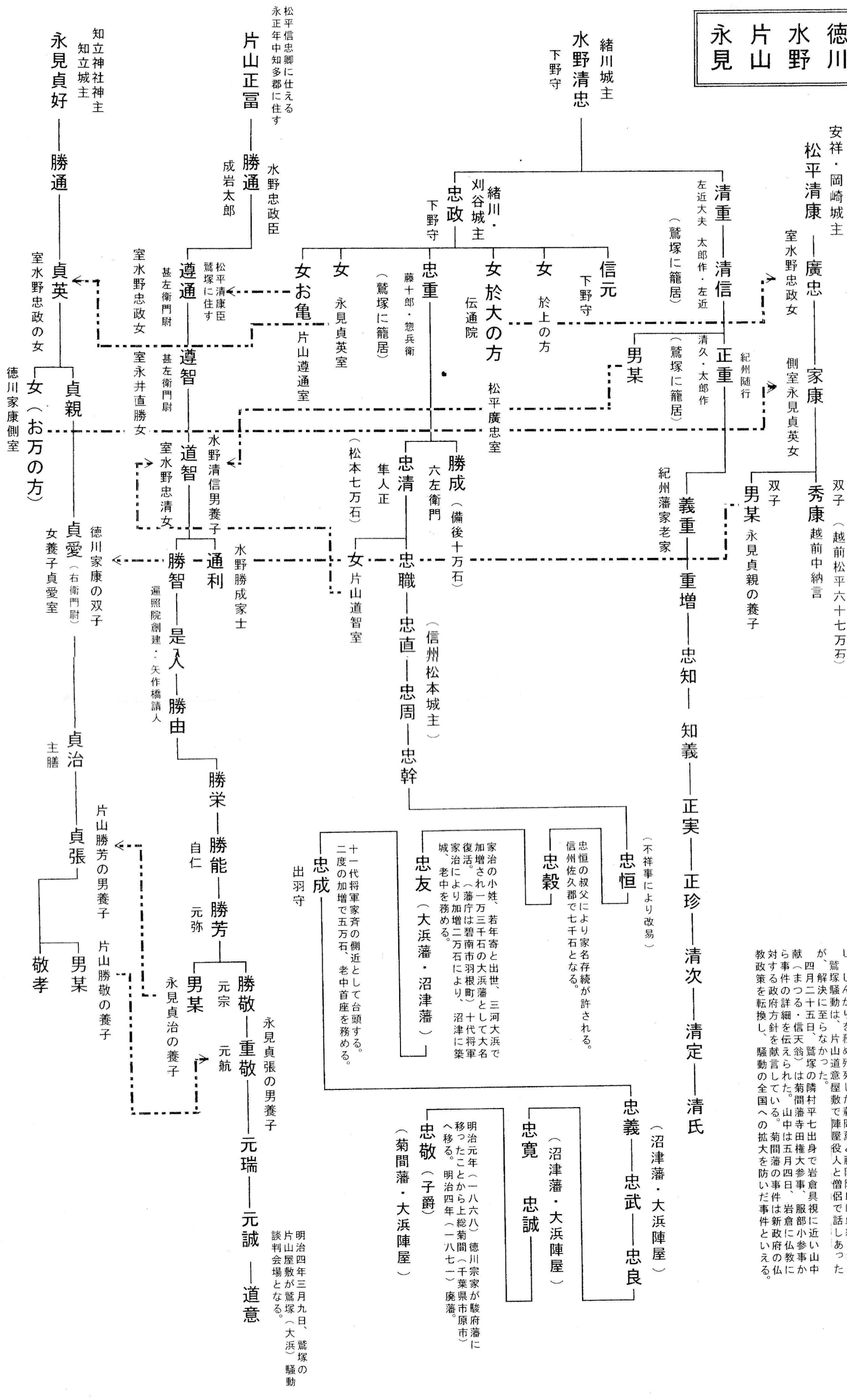
今川・松平元康（徳川家康）勢と激しく戦ってきた織田方・水野信元が、敵に対してとったまさかの行動とは

2026.03.17

【前回記事を読む】16歳で戦場に立ち、敵の首を取った少年武将——桶狭間の戦いに名を刻んだ水野太郎作清久と、丸根砦で散った片山勝高の真実水野信元は今川・松平勢と、村木砦攻めや石ヶ瀬合戦で激しく戦ってきた1。ところが桶狭間では、敵将の今川義元が討たれる「まさか」という事態となった。そしてあることが、織田方・水野信元も「まさか」という信じがたい行動に出たのだ。永禄三年（一五六〇年）五月十九日、松平元…

松平 徳川 水野 片山 永見

五家の縁組関係系譜



昭和五十八年九月調査 尚古庵（藤岡 隆氏）

藤岡隆氏調査資料に加筆、碧南市市史資料集七十二集に掲載
碧南市文化財保護審議会委員 博士（文学）林口 宏

※ 藤岡家は菊間藩士の家系であった。明治四年（一八七二）三月の廃藩置縣に反対する騒動の際、暴徒に対し、しんがりを務め殉死した藤岡氏は血縁となる。騒動は、片山道意屋敷で陣屋役人と僧侶で話しあつたが、解決に至らなかつた。四月二十五日、騒動の隣村平七出身で岩倉具視に近い山中献へまつる・信天翁は菊間藩寺田権大参事、服部小参事から事件の詳細を伝えられた。山中は五月四日、岩倉に仏教に對する政府方針を献言している。菊間藩の事件は新政府の仏教政策を転換し、騒動の全国への拡大を防いだ事件といえる。

（不祥事により改易）
忠恒
忠恒の叔父により家名存続が許される。
信州佐久郡で七千石となる。

忠毅
家治の小姓、若年寄と出世、三河大浜で加増され一万三千石の大浜藩として大名復活。（藩庁は碧南市羽根町）十代將軍家治により加増二万石により、沼津に築城、老中を務める。

忠友（大浜藩・沼津藩）
十一代將軍家治の側近として台頭する。二度の加増で五万石、老中首座を務める。

忠成
出羽守

（沼津藩・大浜陣屋）
忠義——忠武——忠良

（沼津藩・大浜陣屋）
忠寛——忠誠

（菊間藩・大浜陣屋）
忠敬（子爵）

元瑞——元誠——道意

明治四年三月九日、騒動の片山屋敷が騒動（大浜）騒動談判会場となる。